

〔論文〕

# 乳児保育における 保育者との関係性（Ⅲ）

—保育記録を基にした乳児の「泣く行為」の月別内容分析—

佐々本 清 恵  
Kiyoe Sasamoto

大阪総合保育大学大学院  
児童保育研究科 児童保育専攻

大 方 美 香  
Mika Oogata

大阪総合保育大学児童保育学部  
大阪総合保育大学大学院児童保育研究科

本研究は、保育実践における乳児の「泣く行為」に焦点を当て、「乳児の泣く行為の意味」とそれに関わる「保育者の役割」を明確にすることを目的としている。本研究では、2012年、A市A保育所に入所した乳児10人の保育記録から泣く行為の記述を取り出し、取り出した事例を9種のカテゴリーに分類し、クラス集団における月別の内容分析を試みた。その結果、クラス集団においても、乳児の泣く行為には月ごとの内容に特徴があった。その特徴としては、①どの月においても「保育者との関わり」は「乳児の泣く行為」と深く結びついていた②「保育内容」と「乳児の泣く行為」には関わりがあった③月齢による泣く行為の変化と同じように、クラス集団としての泣く行為にも1年を通じて変化があった④ともだちの存在が泣く行為に影響を与えていた⑤月齢の近いグループには、グループそれぞれの特徴があった等が分析考察された。そのことから、クラス集団においても、保育内容等が、乳児の泣く行為に大きな影響を与えることを踏まえ、「保育者の関わり的重要性」が指摘された。

キーワード：乳児、泣く行為、保育者の役割

## I 研究の目的

これまで筆者は「乳児の泣く行為」を、「乳児保育における保育者<sup>(注1)</sup>との関係性（Ⅰ）」（佐々本・大方, 2015）で「情動」、「乳児保育における保育者との関係性（Ⅱ）」（佐々本・大方, 2016）で「乳児の月齢による泣く行為の変化」に焦点を当てて考察を試みてきた。その結果、乳児の「泣く行為」には、情動発達、月齢、環境、体調、保育者の関わり等、様々な要素が含まれていることが示唆された。また、一人一人の乳児の「泣く行為」に関わる「保育者の重要性」も明らかになった。このように、保育者の乳児一人一人との関わりは、乳児保育を考える上で非常に重要な要素であり、保育者の共通の指針である保育所保育指針（2017告示）でも「特定の保育士との信頼関係」という表現で示されている。

しかしながら、保育所での0歳児保育は、特定の保育士との関わりを基にした個人中心の保育が基本であると同時に、家庭を基盤とした「集団保育」でもある。よって筆者は、保育所で保育を受ける乳児の環境には、「集団」という視点も欠かせないと考え、「クラス集団に焦点を当てた」乳児の泣く行為に着目した。

また、月齢別内容分析を行った「乳児保育における保

育者との関係性（Ⅱ）」（佐々本・大方, 2016）において導き出された、子どもたちの共通体験に関わる「保育内容」と「乳児の泣く行為」の関連性として、「心地よい保育の積み重ねが乳児の欲求となる」ことや、「乳児はその欲求を泣く行為で表す」こと、また「乳児の泣く行為を発達過程として受け止めて保育をする」こと等は、保育者が「乳児の泣く行為を肯定的に受け止める要素」となり、保育者が感じている「乳児の泣く行為に対する困り感<sup>(注2)</sup>」の軽減に繋がると期待している。

けれども、はじめに述べたように、保育所での保育が集団保育である以上、集団保育ならではの保育者の関わりやそれに伴う保育者の困り感があるのではないかと。あるとしたら、それを軽減する手立てはないだろうか。以上を考察するために、本研究では、保育計画作成時に用いられることが多い、ひと月を区分とした「クラス集団としての泣く行為」を分析することによって「集団としての月別の特徴」を導き出し、「保育者の援助」を考察することにより、乳児を取り巻く「適切な保育環境への取り組み」や「乳児の泣く行為への保育者の困り感の軽減」がなされることを期待してこの研究に着手した。

## Ⅱ 方法

### 1 観察の対象

A市A保育所0歳児クラス10名。記録の抽出月齢は満月齢とする。（表1）

### 2 記録の期間

2011年4月1日～2012年3月29日の進級前日までの約1年間。

### 3 分析方法

0歳児クラスの保育者3名が、それぞれ担当した乳児3名について記した保育記録から、全ての泣く行為を取り出した。取り出した記述内容はカテゴリー化し考察を行った。なお乳児の泣く行為には、重複する意味があることを前提として複数で検討を行った。その後、カテゴリー化した内容を用いて、対象となった乳児の月ごとの泣く行為の分類及び内容の分析を行った。なお、「乳児の泣く行為」の保育記録は、事前に、乳児の「泣く行為」と「笑う・微笑む行為」の表出について、担任の負担にならない程度の記録を依頼したものである。

### 4 倫理的配慮

保育記録の閲覧は、所長や記録者である保育者、保護者の了解のもと行った。また保育記録からの泣く行為の取り出しは、個人情報保護の観点からコピーや持ち出しはせず、手書きの記録紙を用いた。記録紙は分析後速やかに破棄した。

## Ⅲ 結果と考察

### 1 9種のカテゴリーの内容

#### ① 生理的欲求

生理的欲求は食事、睡眠、排泄、その他の4つの下位カテゴリーとした。4つのカテゴリーの内、食事は乳児のミルクへの欲求も食事として捉えた。また、食事に関係する事柄でも、食事中に泣く等、生理的欲求として捉えられない内容は含まないこととした。睡眠は、保育者が「乳児が睡眠を欲求していると感じた観察内容」のみを入れた。排泄は出る前に泣く行為とし、出た後に泣く行為はその他に入れた。

#### ② 保育者との関わり

保育者との関わりは、欲求、不快、嫉妬・羨ましさ、人見知り、その他の5つの下位カテゴリーに分けた。欲求は、乳児が直接的な保育者との関わりを欲求した場合と物や行動を介して欲求した場合があるが、どちらも保育者への欲求として捉えた。保育者への欲求が物や行動を伴う事例に関しては、1事例に複数の要素があるものとした。不快は、保育者の働きかけに対しての不快と物や行動を介しての不快があったため物や行動を伴う事例に関しては、1事例に複数の要素があるものとした。嫉妬・羨ましさは、子どもという第三者を介したものであるが、嫉妬・羨ましさとして保育者との関わりのみに入れた。人見知りには「知らない人を見て」のように識別として受け止められる場合と親しい保育者に対しての「後追いの時期」にみる泣く行為があったが、今回のデータでは正確な判断ができなかったため、いずれも「人見知り」として捉えた。その他は、欲求、不快、嫉妬・羨ましさ、人見知り以外の保育者との関わりとした。

表1 対象となる乳児とその月齢

対象児	観察開始時	観察終了時	観察開始時の月齢	観察終了時の月齢
A児	4/1	3/29	11か月	23か月
B児	4/1	3/29	10か月	22か月
C児	4/1	3/29	10か月	22か月
D児	4/1	3/29	9か月	21か月
E児	4/1	3/29	6か月	18か月
F児	4/1	3/29	5か月	17か月
G児	4/1	3/29	5か月	17か月
H児	4/1	3/29	3か月	15か月
I児	4/1	5/31	4か月	5か月
J児	10/20	3/29	11か月	16か月

(出所：佐々本・大方 (2016)、p.192 修正・再掲)

③ 物との関わり

物との関わりは、欲求、不快、その他の3つの下位カテゴリーに分けた。欲求は、物への直接的な欲求とした。不快は物への直接的な不快と保育者の関わり方を介した不快があったため、保育者の関わりが含まれる内容に関しては、1事例に関して複数の要素があるものとした。その他は、欲求や不快以外の物との関わりとした。

④ 行動との関わり

行動との関わりは、欲求、不快、その他の3つの下位カテゴリーに分けた。欲求は、行動への直接的な欲求とした。不快は行動への直接的な不快と保育者の関わり方を介した不快があったため、保育者の関わり方が含まれる内容に関しては、1事例に関して複数の要素があるものとした。その他は、欲求、不快以外の行動との関わりとした。

⑤ 子ども同士の関わり

子ども同士の関わりは、欲求、トラブル、その他の3つの下位カテゴリーに分けた。欲求は、子ども同士の関わりを求めて泣いた場合とした。物や行動を介した子ども同士のトラブルについては1事例に関して複数の要素があるものとした。その他はトラブルに発展してはいるが、子ども同士の関わりで泣く行為とした。

⑥ 保護者との関わり

保護者との関わりは、入所（2週間以内・環境の変化も含む）と登所・降所、その他の3つの下位カテゴリーに分けた。入所（2週間以内・環境の変化も含む）を登所・降所と分けたのは、保育所に入所する乳児にとっての入所時の環境の変化は、保護者との分離という以外にも特別な意味を持つものであるからである。また、入所時に泣く行為の目安を2週間以内としたのは、だいたい

表2 保育記録の内容分析に用いた9種のカテゴリーとその下位カテゴリー

カテゴリー	下位カテゴリー	記号	事例（例）
生理的欲求	食事	1a	ミルクが欲しいと泣く。
	睡眠	1b	眠たい時泣く。
	排泄	1c	おしっこが出ることを泣いて知らせる。
	その他	1d	おしっこが出たことを泣いて知らせる。
保育者との関わり	欲求	2a	抱っこして欲しいと泣く。
	不快	2b	水遊びを止められて泣く（行動との重複）
	嫉妬・羨ましさ	2c	新入児に関わる保育士を見て泣く。
	人見知り	2d	人見知りで泣く。
	その他	2e	注意されて泣く。※注意の理由がわからないため
物との関わり	欲求	3a	おもちゃが欲しくて泣く。
	不快	3b	節分の鬼を見て泣く。
	その他	3c	部屋の戸が開いてびっくりして泣く。
行動との関わり	欲求	4a	外に出たいと泣く。
	不快	4b	服を脱ぐのを嫌がって泣く。 （保育者との関わりと重複）
	その他	4c	外に出ると寒くて泣く。
子ども同士の関わり	欲求	5a	園庭で兄を見つけて泣く。
	トラブル	5b	ともだちに押されて泣く。
	その他	5c	ともだちが近づき触れられて泣く。
保護者との関わり	入所時（2週間以内・環境の変化も含む）	6a	登所時泣く。環境の変化で泣く。
	登所・降所	6b	母親との別れで泣く。
	その他	6c	参観日、母との食事前に泣く。
体調	病気	7a	鼻づまりで泣く。
	その他	7b	疲れて、少しのことで泣く。
理由不明		8	理由がわからずぐずぐず泣く。
その他		9	暗い部屋を見て泣く。

（出所：佐々本・大方（2016）、p.193 加筆・修正）

2週間ではほとんどの乳児が登所時泣かなくなり、保育記録の「笑う・微笑む」の記述が増え、生活リズムが整い、担任保育者の顔を覚えたことにより、環境に慣れたと判断したためである。登所・降所は、環境に慣れた段階での保護者との別れや出会いでの泣く行為とした。その他は行事を含めた保護者との関わりとした。

### ⑦ 体調

体調は、病気とその他の2つの下位カテゴリーに分けた。病気は、熱、咳、下痢等直接的な病気と思われるものとした。その他は、疲れ、病み上がり、現在病気ではないが体調による機嫌の悪さで泣く行為とした。

### ⑧ 理由不明

理由不明は、保育者が理由を感じ取れなかったものであるが、保育現場ではよくみられる事例であるためカテゴリーの一つとした。

### ⑨ その他

①～⑧のカテゴリーに分類できなかったものあるいは、その記述だけでは判断できなかったものとした。

## 2 「月別内容分析」における結果と考察

表3は、「9種のカテゴリーとその下位カテゴリー」の月別の分布表である。また、表4は、分布表を基に、月別の「泣く行為の内容」の頻度と割合をまとめたものである。結果は次のようになった。

### ① 4月（事例の月齢は、満年齢を示すため、月齢が重複している場合がある）

4月は、「生理的欲求（32%）」と「保護者との関わり（32%）」がともに多かった。生理的欲求で泣く行為は、E児（7か月）、F児（5か月）、G児（5か月）、H児（3～4か月）、I児（4～5か月）に見られ、A児（11か月）、B児（10か月）、C児（10か月）、D児（9か月）には見られなかった。生理的欲求のクラス全体での記載回数は、食事・ミルクが8回、睡眠が10回であった。E児（7か月）は、睡眠が5回あるものの、食事・ミルクの記載はなかった。F児（5か月）は、睡眠の記載が1回のみだった。G児（5か月）は、食事・ミルクの記載が2回、睡眠が1回だった。I児（4～5か月）は、食事・ミルクの記載が4回、睡眠が1回だった。H児（3～4か月）は、食事・ミルクが2回、睡眠が3回だった。このように、クラス内には、「生理的欲求で泣く行為の記載のある乳児」と「生理的欲求で泣く行為の記載のない乳児」がおり、その中でも、食事・ミルクで泣く乳児（G

児、H児、I児）、ミルク・食事では泣かないが、睡眠時には泣く乳児（E児、F児）がいた。

「保護者との関わり（入所時の環境の変化も含めた保護者との別れ）で泣く行為」は、E児を除いた8名の乳児でみられた。回数は、A児（12か月、3回）B児（11か月、2回）C児（10か月、4回）D児（9～10か月、5回）E児0回、F児（5か月、1回）G児（5か月、1回）I児（4～5か月、2回）H児（3か月、2回）であり、どちらかといえば、月齢の高い乳児の記載回数が多いが、記載回数の違いが月齢差であるのか個人差であるかはこのデータだけでは判断できなかった。

「保育者との関わりを求めて泣く行為（16%）」の記載回数は、欲求が3回、不快が1回、行動と重複しているものが6回あった。記載されている乳児は、6人（B児、D児、E児、F児、G児、I児）、記載がなかったのは3人（A児、C児、H児）だった。記載内容は、「抱っこして欲しい（B児）」「相手をして欲しい（G児）」という欲求や「保育士に助けを求めて（D児）」「腹ばいで遊んでいて助けを求める（F児）」等で、保育者が乳児の行動からその理由を判断しているものがあつた。保育者の関わりに対しての不快では、主なものとして「寝かそうとすると大泣き」であり、保育者の寝せようとする行動に対して泣く行為で不快を示す乳児がいた。また、入所後間もなくの乳児であっても、「知らない人を見て泣く（D児・10か月）」のように、特定の保育者を覚え、他の保育者に対して泣く行為がみられた。

「行動との関わり（7%）」においては、記載があつたのは2人だった。内容は「保育者との関わり」と重複しており、行動の欲求や不快を示した「腹ばいで遊んでいて助けを求める（F児・6か月）」「寝かそうとすると大泣き（E児・7か月）」があつた。体調に関しては3人の記載があり、内容は、「体調が悪い（B児、H児）」という全体的な身体の不調を記したものと「下痢で体調が悪い（I児）」という具体的なものであつた。月齢には関係がなかった。

「物との関わり」と「子ども同士の関わり」はそれぞれ2%であつたが1例が重複していた。内容はD児の「ともだちの持っているおもちゃがもらえずに泣く」であり、集団生活においては、月齢によって、入所した直後からともだちとの関わりで泣く行為があつた。

4月は、乳児にとって「入園という大きな環境の変化」があり、環境の変化に対する不安を泣く行為で表していた。保育者は、体調が悪くて泣いたり、なかなか眠らない乳児に対応したりしながら、乳児一人一人の生活リズムや状態を把握し、集団生活への適応を試みていた。乳児と保育者がともに新しい環境に慣れる努力をしながら、



徐々に「特定の保育士を覚えて泣く」等、関係を構築していく月となった。また、入所した直後からともだちとの関わりで泣く行為があった。

② 5月（事例の月齢は、満年齢を示すため、月齢が重複している場合がある）

5月の記載内容は、4月の62内容から23内容に減り、割合は「生理的欲求（32%）」「保育者との関わり（31%）」「物との関わり（17%）」「行動との関わり（13%）」で泣く行為と続いた。「保護者との関わり」「子ども同士の関わり」「体調」で泣く行為の記載はなかった。内容を更に調べていくと、生理的欲求で泣く行為は、食事・ミルクは、C児（11か月、1回）G児（6か月、2回）であり、睡眠時に泣く行為は、F児（6か月、1回）G児（1回）H児（5か月、3回）であった。G児は「食事・ミルク」、「睡眠」の両方で泣いていた。

保育者との関わりで泣く行為は、「担当保育士がいなくて泣く（A児・13か月）」や「人見知りで泣く（D児・11か月、E児・8か月）」等、保育者と乳児の関わりから発生する事例や「薬を飲むのを嫌がって泣く（E児）」や「外遊びの後部屋に帰ろうとすると泣く（A児）」等、保育者の行為への不快と物への不快、行動への不快が重なっている事例があった。「物への関わりで泣く行為」や「行動との関わりで泣く行為」は、全て「保育者との関わりで泣く行為」と結びついていた。

5月は、登所時に泣かなくなったことから、乳児が保育所生活に慣れてきたことがうかがえた。と同時に、保育者との関わりで泣く行為が多くなり、「保育者を求めて泣く」「担任以外への人見知り」等、保育者と乳児の関係の深まりによる、乳児の泣く行為がみられた。生理的欲求で泣く行為は、全体の32%と相変わらず多いが、それ以外の、物との関わりや行動との関わりで泣く行為もみられ、慣れたことによって、乳児の世界が広がり泣く行為の種類が多くなった。

③ 6月（事例の月齢は、満年齢を示すため、月齢が重複している場合がある）

6月は、「生理的欲求で泣く行為（15%）」にかわり、「保育者との関わりで泣く行為（25%）」が多くなり、次いで保育者との関わりを含んだ「行動との関わりで泣く行為（18%）」「物との関わりで泣く行為（12%）」の割合が多くなった。更に保育者との関わりをみると、保育者への欲求は、「抱っこを求めて泣く（A児・14か月）」や「1対1で相手をして欲しくて泣く（D児・12か月）」、「関わって欲しくて泣く（G児・7か月）」「傍に人がいて欲しくて泣く（H児・5か月）」等、保育者との1対1の

関わりを求めて泣く乳児が多くなった。また、「おもちゃで遊んでいたのを保育士に止められて（B児・13か月）」や「欲しいものが取れず、保育者にとって欲しくて泣く（E児・9か月）」等、保育者への欲求や不快が物や行動に結びつくものがみられた。「行動との関わりでの不快」は、歯科検診での不快を泣くことで表していた（A児、C児・11か月、E児）。しかし、泣かなかった乳児もおり個人差があった。理由不明が2人、その他が5人おり、4月と比べて記載内容は少なくなったものの、理由がわからなかったり多様化したりしていた。生理的欲求で泣いた乳児は、2人（F児、食事・ミルク、H児、睡眠）となった。

6月は、クラス全体の泣く行為が、「生理的欲求で泣く行為」から「保育者との関わりで泣く行為」に移行した月である。移行の要因としては、「生理的欲求で泣く乳児の減少」があげられる。減少の理由としては、「乳児が保育所生活のリズムに慣れた」「保育者が乳児のリズムを事前に察知し対応できるようになった」乳児の月齢が高くなることで「生理的欲求を泣く行為で示すことが減った」等が考えられた。また、保育者と親しくなり、「1対1での関わりを求める」乳児が多くなったことや、保育者への欲求や不快が物や行動に結びつくようになったことで、クラスにおいても保育者の「乳児の泣く行為への関わり方の変化」があったと推測できる。

④ 7月（事例の月齢は、満年齢を示すため、月齢が重複している場合がある）

7月は、「保育者との関わり（42%）」と「物との関わり（32%）」で泣く行為が7月の全記載内容の3分の2以上を占めた。また、初めて記載のない乳児がいた。（A児、B児）反面、記載内容5回（D児・12～13か月）、記載内容4回（H児・6～7か月）の乳児がおり、この2人が7月のクラスの記載回数を押し上げていた。D児の記載内容は「甘えて泣く」、「ともだちのおもちゃを取りに行き、もらえず保育士に泣いて訴える」、「おもちゃを取りに行きつねられて泣く」「食事で嫌いな物が出て泣く」等、泣く行為は、自分の思いを相手に伝える行為であり、保育者もその思いを感じ取ろうとしていた。またH児は、「ミルクが欲しい」「抱っこして欲しい」等、欲求を泣く行為で示していた。

7月は、「泣く行為の記載がない」あるいは「少ない乳児」と、「記載が多い乳児」にわかれ、個人差が目立つ月となった。また、同じように「よく泣く乳児」であっても内容には明らかな違いがあり個人差がみられた。ともだちとの関わりで泣く行為は、「子ども同士のトラブル」

に発展する「泣く行為」がみられるようになり、保育者はその対応にも心を配る必要があった。自分の思いを伝えようとする泣く行為が出てきたことにより、保育者は、何故泣いているのかを「より深く推察しながら」乳児の思いを感じ取る必要があった。

⑤ 8月（事例の月齢は、満年齢を示すため、月齢が重複している場合がある）

8月は、記載内容は22例と少ないが、約半分を「保育者との関わり（45%）」で泣く行為が占めていた。その次に「行動との関わり（23%）」「生理的欲求（18%）」で泣く行為へと続いた。保育者との関わりで泣く行為を詳しくみると、「手を洗おうとして止められて泣く（A児・15～16か月）」や「してはいけない行動をあ！と言って止められて泣く（D児・14か月）」あるいは「水遊びをやめさせられて泣く（H児・7か月）」等があり、保育者との関わりで泣く行為は、乳児の行動欲求と重複しているものが多かった。また、「人見知りで抱っこを求めて泣く（D児・14か月）」等、人見知りをする乳児や、抱っこを求めて泣く乳児（D児、E児）もみられた。生理的欲求で泣いたという記載が2回、理由不明、体調、その他も1回ずつだった。

8月は、水遊びを保育に取り入れたことにより、水遊びに関係した泣く行為がみられた。例えば、「水遊びを止められて怒って泣いた」A児には、「ご機嫌で水遊びを楽しむ経験が」あり、それが、「まだ水遊びをしたい」という欲求になったと考えられた。「初めての沐浴でびっくりした」E児が、「水遊び、お湯遊びを喜ぶ」ようになったのは、慣れることで、「不快」が「快」になったと考えられた。このように「乳児の泣く行為」は「保育内容」と深く結びついていた。（表5）保育者には、「保育内容」とそれに伴う「乳児泣く行為を推察」した「保育計画の作成」が必要だと思われた。

⑥ 9月（事例の月齢は、満年齢を示すため、月齢が重複している場合がある）

9月も「保育者との関わりで泣く行為（38%）」が多いが、「保護者との関わりで泣く行為（22%）」も多かった。4月から8月まで記載がなかった「保護者との関わりで泣く行為」が、9月に入って多くなった要因としては、新入児の存在があげられる。J児は、9月の後半、11か月で入所した。2日間は保護者との別れで大泣きしたものの、その後泣かずに登所できるようになった。また、新入児の影響は、他児の保育者との関係にも影響を及ぼしていた。「新入児に関わる担当保育士を見て、自分もしてほしくて（D児・15か月）」泣いたように、「羨ま

しさ」を感じる乳児もいた。また、この園では9月に運動会が行われるため、運動会当日、「保護者との別れ（B児・16か月）」で泣いたり、「運動会に保護者と参加して（E児）」泣いたり、「朝の別れの時・運動会の間（D児・15か月）」の両方で泣いていた乳児もいた。「体調を崩して泣く乳児」も多くみられ「疲れて少しのことで泣く（C児・15か月）」や「下痢で泣く（F児・10か月）」「食欲がない（H児・8か月）」等で泣く乳児がおり、その泣きには夏の疲れや運動会の影響が推察された。それは登所時の乳児の様子にも表れ、運動会以外でも「保護者との別れで泣く乳児（C児、H児・8か月）」や「久しぶりの登所で泣く」等があった。

9月は、運動会という大きな行事があった月である。行事に参加することは、日常の保育所生活とは違う環境の場に参加するということであり、その不安を泣く行為で表していた。また、「少しのことで泣く」や「下痢」「食欲がなくて泣く」という記述があり、その理由を乳児の身体的特徴から考察すると、「乳児は体温が高めで、体温調節の機能は間脳にあり、自律神経や内分泌系を介して調整されますが、その機能は年齢が小さいほど未熟です（家庭の医学、1985）」とあるように、「疲れ」や「食欲のなさ」は、夏の暑さや室内と室外の温度差により体温調整がうまくいかず、体力が奪われることも一因だと考えられた。そのため、夏の疲れが残る9月の運動会には、身体的な配慮も必要であった。このように、保育所ならではの経験が用意されている保育所生活の場合、その経験が「快」に結びつくような保育者の配慮が必要であった。また、ともだちとの関わりにおいては「新入児の加入」という大きな出来事があった。新入児の加入は、新入児のみならず、他の乳児にも影響を与えていた。新入児は、クラス集団としても受け入れ体制を整える必要があった。

⑦ 10月（事例の月齢は、満年齢を示すため、月齢が重複している場合がある）

10月は、「保育者との関わりで泣く行為（35%）」が多かったが、記載のない乳児が3人（A児、B児、E児）おり、D児（15～16か月）の泣く行為が割合の多くを占めていた。記載内容の割合は、1事例に2つあるいは3つの内容を入れているので、観察記録の実際の記載件数との誤差があるが、記載件数においても全17件中8件をD児が占めていた。D児以外では、「担任がいなくて（C児・16か月）」泣いたり「病み上がり」に抱っこを求めて（F児・11か月）」泣いたりした乳児がいたが、記載件数は少なかった。また、「睡眠」で泣いた乳児も2人いたが、それぞれ1回と記載件数としては少なかった。D

児については様々なことを泣く行為で表しており、「乳児保育における保育者との関係性（I）」でもD児の分析を行っている。

10月は、クラス全体での泣く行為の記載が少なく、最も多かったD児の泣く行為も周りに影響を及ぼすことはなく、「泣く行為」に関しては、クラスとしては比較的落ち着いた月となった。その要因としては、日常とは異なる大きな行事がなかったことや新入児が慣れたこと等があげられる。

⑧ 11月（事例の月齢は、満年齢を示すため、月齢が重複している場合がある）

11月は、記載件数及び記載内容ともに最も少ない月だった。D児を含めた3人の記載がなく、生理的欲求で泣く乳児もいなかった。記載内容12例の内半数が「保育者との関わりで泣く（41%）」であり、次が「保護者との関わりで泣く」であった。保護者との関わりで泣く行為は「参観日で泣いた（B児・18か月）（C児・17か月）」等の記載があった。

11月は、参観日という通常とは違う環境が乳児に影響を与えたものの、泣く行為の記載回数が最も少なく落ち着いた月であった。その要因としては、「参観以外は通常の生活であったこと」や「生理的欲求で泣く行為」がなくなったこと「体調不良で泣く乳児がいなかった」こと等があげられる。

⑨ 12月（事例の月齢は、満年齢を示すため、月齢が重複している場合がある）

12月は、「物との関わりで泣く行為（29%）」が最も多く、次いで「保育者との関わりで泣く行為（20%）」「体調が悪くて泣く行為（18%）」「行動で泣く行為（12%）」となった。物との関わりで泣く行為を詳しくみると、「サンタクロース・トナカイを見て」が6人（A児・20か月、B児・19か月、E児・15か月、F児・14か月、H児・12か月、J児・14か月）おり、クリスマス会に参加しての「初めて見たものに対する泣く行為」であった。この泣きか、恐怖であるか嫌悪であるか拒否であるかは判別できないが、泣く行為は、サンタクロースやトナカイといった初めて見るものに対しての不快表現であった。その上で「泣かなかった乳児（G児・13か月）」の記載もあり、保育者は、泣くであろうと予想していた事柄に乳児が泣かないことも気にかけていた。また、「体調が悪くて」泣く乳児も3人みられた（B児、D児・18か月、F児）。記載回数は1回から3回と乳児によってばらつきがあり、早く体調が戻った子、なかなかすっきりしない子がいた。その他、「午睡前に泣く（B児）」「オマルで便

をして驚いて（D児）」「オマルに座る度（J児）」等があり、保育者には、理由不明で泣く行為と同じように、泣く行為が発生した原因はわかるものの、何故泣くのかわからない行為があった。

12月は、行事による「保育所ならではの新しい出会い」と「体調の崩れ」によって泣く行為が多くみられる月であった。「行事はいつもと違う雰囲気の中で初めてのものに出会う場であり、そこで感じる恐れや不安は、初めてのものに対する拒否的反応として捉えることができる」（佐々本・大方，2016）ように、人の「サンタクロース」や「トナカイ」というような「動く奇異な物」への変装は、「不安」や「驚き」「嫌悪」等に結びつくことがあることを念頭に入れた保育者の関わりが必要であった。12月にも多くの「体調の悪さで泣く行為」がみられたことは、季節（感染症や風邪が流行る時期）と「乳児の泣く行為」の関係も推察された。

⑩ 1月（事例の月齢は、満年齢を示すため、月齢が重複している場合がある）

1月は、「保育者との関わり（32%）」「行動との関わり（29%）」「物との関わり（28%）」「子ども同士の関わり（11%）」での泣く行為があり、それ以外の内容記載はみられなかった。記載のない乳児2人（C児、J児）から記載が8回の乳児（H児・13か月）まで乳児によって記載数に差があった。最も記載の多かったH児の泣く行為を調べると「後追いをして」「知らない人に声を掛けられて」「人見知りをして」等、後追い行動を伴った人見知りが始まっていた。その行動はG児（記載3回）にもみられ、「場所見知り」「人見知り」「後追い」で泣いたという記述があった。物との関わりは、「獅子舞を見て（B児・20か月、H児・16か月、F児・15か月、H児・16か月）」「保育士のフラメンコ姿を見て（A児・21か月）」のように行事に参加し、新しい物に触れたためであった。これまで以上に「ともだちとの関係で泣く行為」もみられるようになった。内容は、「風船をともだちに割られて泣く（D児）」「おもちゃを取り込み1つでも取られると泣き伏せる。（D児）」「ともだちの本を取りに行き取れないと泣く（E児・16か月）」等、子ども同士のトラブルに発展する事例があった。

1月は、12月に引き続き行事への参加による泣く行為がみられた。また、人見知りについては、「生後6か月頃から表れる人見知りや分離不安は、認知能力の発達に基づく社会的感情の変化である。」（乳幼児発達事典，1985）と記載され、保育所保育指針解説書（2008）のおおむね6か月から1歳3か月未満の項にも、「人見知りをするようになる」「人見知りは、特定の大人との愛着関係が



育まれている証拠である」と記載されている。また、松村（2006）は、Sroufe（1995）の研究として「2か月で、外界への関心による快、3か月で、欲求不満反応、4か月で驚き、大喜び、活発な笑い、7か月で怒り、喜び、9か月で人見知り等の恐れ、12か月で腹立たしさ、不機嫌、不安、恐れ、得意の情動がみられる」と紹介しており、人見知りには「恐れに対する情動発達」も影響していると思われた。このように、人見知りは成長の過程であり、その乳児に関わるためには、職員同士の連携も必要であった。また、ともだちとの関わりもトラブルに発展する場面がみられ、保育者には、お互いの乳児への対応が必要であった。

⑩ 2月（事例の月齢は、満年齢を示すため、月齢が重複している場合がある）

2月は、「物との関わりで泣く（48%）」ことが多くなり、次いで「保育者の関わり（18%）」「行動との関わり（15%）」「体調（7%）」で泣く行為へと続いた。物との関わりでは、節分の行事で出会った「鬼」の存在が大きく影響している。保育者は、鬼は遠くから見る等の配慮をしているものの印象が強く、少し見ただけで泣く乳児が8人と多かった。（A児・21か月、B児・21か月、C児・20か月、D児・19か月、E児・17か月、F児・16か月、J児・16か月、H児・14か月）保育者との関わりでは、「担当保育士が離れると泣く（B児）」「泣くと抱っこしてもらえるとわかって泣く（J児・16か月）」等、乳児の泣く行為が保育者とのコミュニケーションとして使われるケースが増えてきた。体調では、「寝不足（A児）」「いつもよりぐずったり泣いたり（H児）」と、病気以外の体調の悪さを訴えていた。「ともだちに押されて（F児・16か月）」等、ともだち間のトラブルもみられた。

2月は「節分の鬼」という新しい物に出会う月となり、そのために泣く乳児が多くいた。また、泣く行為を「意図的な保育者とのコミュニケーションの手段として使う」乳児が出てきた。言語と泣く行為については、志村（2005）は、「乳児の音声における非言語情報に関する実験的研究」の中で、生後1年を経て「言語表出の能力が成熟するにつれて、言語による情報伝達へと変容していく」とし、斉藤・武井・荻野・大浜・辰野（1980）は、「不快の表出である、〈泣き〉〈むずがり〉は8・9か月以降減少し、伝達機能としての〈むずがり〉は、8・9か月頃の単なる不快の表出から母親に向けられた伝達的不快の訴えへと機能的に変化していく」ように、乳児の泣く行為が「生理的な泣き」から「伝達の機能を持つ言語としての泣き」へ発達していくことが示されている。このようにクラスのなかでの泣く行為は、言語の意味も

含めた「保育者と乳児のコミュニケーションの方法」へと移行し、その割合も多くなっていくことが示された。

⑫ 3月（事例の月齢は、満年齢を示すため、月齢が重複している場合がある）

3月は、記載のない乳児が3人（A児、B児、E児）いる等、11月に次いで記載件数が少なかった。その中で再び「保育者との関わりで泣く（47%）」が多くなり、その内容は「おやつのお替わりが欲しいと泣く（C児・21か月）」「好きなものだけ食べていやいやをして泣く（D児・21か月）」「保育士の上の膝の上に座りたくて泣く（F児・17か月）」等、泣く行為を「意図的な保育者とのコミュニケーションの手段として使う」行動がより明確になってきた。

3月は、一人一人の泣く行為に差があり、記載のある乳児と記載のない乳児の差が大きかった。記載のある乳児については、泣く行為を、より「意図的な保育者とのコミュニケーションの手段」として使う場面がみられた。よって保育者の泣く行為への対応もより複雑なものになっていた。

3 「グループ別内容分析」における結果と考察

表3「9種のカテゴリーとその下位カテゴリーの分布表」を、入所時9か月から11か月（A児、B児、C児、D児）のAグループ、入所時5か月から6か月（E児、F児、G児）のBグループ、入所時3か月（H児）Cグループに分け、乳児の泣く行為において、筆者が重要だと感じた「入所時に泣く行為」「生理的欲求で泣く行為」「人見知りで泣く行為」で分析し、グループ集団としての特徴を導き出すことにした。

① 入所時に泣く行為

高月齢児のグループであるAグループでは、全員が入所時に泣いたが、二週間以内で泣かずに登所できるようになった。Bグループの入所時に泣く行為は、「入所3日目不安で泣く（F児・5か月）」や「入所時環境の変化で泣く（G児・5か月）」等の記載があるものいずれも1回と記載回数は少なく、登所時に「保護者との別れで泣いた」という記載はなかった。低月齢児のCグループH児は、入所時3か月であった。登所時に泣いたという記載はなかったが「環境の変化で泣く」という記載があった。どのグループも、「入所時」や「入所してしばらくの間」は泣く行為はみられたが、その記載の文言には多少の違いがあった。その違いとは、Aグループでは、「登所時の保護者との別れ」Bグループでは、「不安・環境の変化」Cグループは「環境の変化」であり、保育者はその違い



を感じ取ることで、乳児の泣く行為に対応していたことが推察される。

## ② 生理的欲求で泣く行為

Aグループの生理的欲求で泣く乳児は、5月に1記載があったものの、1年を通してほとんどみられなかった。Bグループは、4月はどの乳児にもみられ、泣く行為全体に占める割合も多かった。E児は4月まで、F児は7月まで、G児は9月まで記載があった。低月齢児のCグループH児は、(生後9か月を迎える)9月までの泣く行為のほとんどを、生理的欲求で泣く行為が占めていた。このように、個人差はあるものの、グループ集団としての泣く行為の割合も、一人一人の月齢の発達によって変化していった。

## ③ 人見知りで泣く行為

人見知りにおいてはAグループでは、8月にD児(14か月)、Bグループでは、5月(E児・8か月)1月(G児・14か月)にみられ、G児の人見知りには「後追い行動」も記載されていた。またCグループH児の人見知りは、1月(12か月)に始まり3月(14か月)まで続いていた。人見知りに関しては、1年中クラス内のいずれかの乳児にみられ、月齢は8か月から14か月に亘っていた。

このように月齢の近いグループの乳児には、個人差はあるが「入所時の泣き」「生理的欲求」「人見知り」の時期に、似たような特徴があった。

## 4 「月別記載内容の変化」における結果と考察

表4の割合を図で示したのが、図1「月別の記載内容の変化」であり、この表は、内容別の変化を「生理的欲求」「保育者との関わり」「物との関わり」「行動との関わり」で泣く行為に焦点を当てて表したものである。なおこのクラス集団は、4月から5月まで9名、6月から9月まで8名、9月から3月までは、生後11か月の途中入所児を迎え9名になった集団である。よって、一年を通して同じ乳児の泣く行為の推移を示したのではなく、あくまでクラス集団内で発生した泣く行為の結果であることを前提として考察をした。

### ① 生理的欲求で泣く行為

生理的欲求で泣く行為は、4月は20回と多いが、5月には急激に減少し、7月になると2回になり、11月からはほぼみられなくなった。このクラスの乳児は全員12月で1歳になることから、生理的欲求で泣く行為の減少は、クラス集団の月齢構成にも左右されると思われた。生後

11か月で入所したJ児にも生理的欲求で泣く行為の記載はなく、その点からも0歳児クラスの生理的欲求での泣く行為は、月齢構成によっても大きく左右されることが推察された。

### ② 保育者との関わりで泣く行為

保育者との関わりで泣く行為は、どの月でもみられ、5回から15回の間を1年間推移した。保育者との関わりで泣く行為が1年を通じてみられた背景には、「保育者との関係を求める乳児の存在」がある。ポウルビー(1907)は、愛着形成過程を「第一段階、人物の判別を伴わない定位。通常は誕生から12週まで。第2段階、判別された人物に対する定位と発信行動や接近行動の段階。生後12週頃から6か月頃まで。第3段階、発信行動と移動行動による弁別された人物への接近を維持する段階。通常6～7か月頃から2歳頃まで」(乳幼児発達事典, 1985)と論じているが、保育者との「1対1の関係を求める行動」は、乳児の発達段階として受け止めつつ、クラスを運営していく必要があった。また内容を詳しくみると、保育者を求めるだけでなく、物や行動と重複している場合も多くあった。「薬を飲ませようとする」と嫌で泣く(保育者の行動と物の重複)、「寝かせようとする」と大泣き(保育者の行動と乳児の行動との重複)等、保育者が乳児に求める内容に対しての拒否的な泣く行為もあった。よって、保育者には、保育者の要求と乳児の欲求との折り合いを見つけながらの対応が求められた。その他、9月の記述内容が多くなったのには、途中入所児の存在がある。途中入所は、入所してくる乳児の受け入れだけではなく、他の乳児の「新入児に関わっている保育者を見て自分もして欲しくて泣く(D児)」等の欲求にも対処する必要があった。

### ③ 物との関わりで泣く行為

「物との関わりで泣く行為」は、1年の内で、多い月と少ない月があった。前項でも説明したが、多い月は、12月、1月、2月であり、全員が行事に参加し「トナカイ」「サンタクロース」「獅子舞」「鬼」という「動く奇異なもの」に出会った月でもあった。保育内容とも重複するが、行事への参加は、いつもと違う環境に対して、不安や拒否、驚き等を泣く行為で示す乳児がいることを予想して、参加の仕方を工夫する必要がある。このように、保育所ならではの経験が用意されている保育所生活の場合、その経験が「快」に結びつくような保育者の配慮が必要であった。

乳児保育における保育者との関係性（Ⅲ）

表3 9種のカテゴリーとその下位カテゴリーの分布表

9種のカテゴリーとその下位カテゴリーの分布表										
月	A児	B児	C児	D児	E児	F児	G児	H児	J児	I児
4	6a 6a 6a	6a 6a 2a 7b	6a 6a 6a 6a	2a 2b <span style="border: 1px solid black;">3a5b</span> 6a 6a 6a 6a 6a	1b 1b 1b 1b 1b <span style="border: 1px solid black;">2b4b</span> 9	1b <span style="border: 1px solid black;">2a6a</span> <span style="border: 1px solid black;">2a4b</span> <span style="border: 1px solid black;">2a4b</span> <span style="border: 1px solid black;">2a4b</span>	1a 1a 1b 2a 6a	1a 1a 1b 1b 1b 1c 6a 6a 7b 9		1a 1a 1a 1a 1b <span style="border: 1px solid black;">2a7b</span> 6b 6a 7a
5	9 <span style="border: 1px solid black;">2b4a</span> 2a 2a 4b	3b	1a	2d 3b 3b	<span style="border: 1px solid black;">2b3b</span> 2d	1b <span style="border: 1px solid black;">2a4a</span>	1a 1a 1b	1b 1b 1b		欠席
6	2a 3c 4b 8 8	<span style="border: 1px solid black;">2b3a</span>	4b	2a 4b <span style="border: 1px solid black;">3a5b</span> 9	<span style="border: 1px solid black;">2a3a</span> <span style="border: 1px solid black;">2b4b</span> 4b 9	1a <span style="border: 1px solid black;">2a4a</span> 9 9	2a 8 9	1b 1b 1b 1b 2a 9		
7			2a	2a 3b 3b <span style="border: 1px solid black;">2a3a</span> <span style="border: 1px solid black;">3a5b</span>	3b	<span style="border: 1px solid black;">2a7b</span> <span style="border: 1px solid black;">2b3b</span>	1b 5c	1a 2a 2a 2a		
8	4b <span style="border: 1px solid black;">2b4a</span> <span style="border: 1px solid black;">2b4a</span> 5a	7b 8		2a 2d <span style="border: 1px solid black;">2a2d</span> <span style="border: 1px solid black;">2b4a</span>	2a	1a 9	1d	<span style="border: 1px solid black;">2a4a</span> <span style="border: 1px solid black;">2a3a</span>		
9		6b 9	2a 2a 6b 7b	2a 2a 2a 2a 2a <span style="border: 1px solid black;">2b4b</span> <span style="border: 1px solid black;">2a2c</span> 3a <span style="border: 1px solid black;">3a5b</span> <span style="border: 1px solid black;">6b6c</span> 7a	6c	2e 5b <span style="border: 1px solid black;">2b4a</span> 7a <span style="border: 1px solid black;">2b4b</span>	9	1b 2a 4b 6b 7b	6a 6a	
10			2a	2a <span style="border: 1px solid black;">2a3a3b</span> 3b <span style="border: 1px solid black;">2b3b</span> 4a 5a 7a 9		2a 2a	1b	1b 9	<span style="border: 1px solid black;">2b4b</span> 7a 9	
11	4b	6c	2a 2a 6c 6c				<span style="border: 1px solid black;">2a4a</span>	3b	<span style="border: 1px solid black;">2c3a</span> 2d	
12	3b	<span style="border: 1px solid black;">2a4a</span> 3b 4c 7b 9 9	<span style="border: 1px solid black;">2a3b</span>	<span style="border: 1px solid black;">3a5b</span> 7b 7b 7b 9	3b	2a <span style="border: 1px solid black;">2a3a</span> 3b 7b 7b	<span style="border: 1px solid black;">2a2c</span>	3b	1b 2d 3b <span style="border: 1px solid black;">3a5b</span> 4b 4b 9	
1	3b	3b 4b		<span style="border: 1px solid black;">2b4b</span> <span style="border: 1px solid black;">3a5b</span> 5b	<span style="border: 1px solid black;">2a4a</span> <span style="border: 1px solid black;">2b4a</span> 3a <span style="border: 1px solid black;">3a5d</span> 4d	3b	2d 4a 4b	2a 2a 2d 2d 2d 3b 3d 4b		
2	3b 7b	2a 3a 3b 3b	2a 3b	3a 3b	3b 4b	<span style="border: 1px solid black;">2b4a</span> <span style="border: 1px solid black;">2b4a</span> 3b 5b	6b	3b 4b 7b	2a 3b 3b 3b 8	
3			<span style="border: 1px solid black;">2a3b</span>	2a 2a <span style="border: 1px solid black;">2a2b3a3b</span> 5a 7b		2a	9	2d 2d 3b 7a	8	
	A (観察開始時9か月から11か月)				B (観察開始時5か月から6か月)			C (観察開始時3か月)	(途中入所、退所)	

(本表は、佐々本・大方 (2016)、p.196 の資料を月別に表示した。また、一事例の中に複数の内容が含まれると判断したものは□で表した。)

表4 泣く行為の月別記載内容の頻度と割合

月 内容	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
生理的欲求	20 (32%)	8 (35%)	5 (15%)	2 (10%)	2 (9%)	1 (3%)	2 (10%)	0 (%)	1 (3%)	0 (%)	0 (%)	0 (%)
保育者との関わり	10 (16%)	7 (31%)	8 (25%)	8 (42%)	10 (45%)	14 (38%)	7 (35%)	5 (41%)	7 (18%)	9 (32%)	5 (4%)	8 (47%)
物との関わり	1 (2%)	4 (17%)	4 (12%)	6 (32%)	1 (4%)	2 (5%)	4 (10%)	2 (17%)	10 (29%)	8 (28%)	13 (48%)	4 (23%)
行動との関わり	4 (7%)	3 (13%)	6 (18%)	0 (%)	5 (23%)	4 (11%)	2 (10%)	2 (17%)	4 (12%)	8 (29%)	4 (15%)	0 (%)
子ども同士の関わり	1 (2%)	0 (%)	1 (3%)	2 (11%)	1 (4%)	2 (5%)	1 (5%)	0 (%)	2 (6%)	3 (11%)	1 (4%)	1 (6%)
保護者との関わり	20 (32%)	0 (%)	0 (%)	0 (%)	0 (%)	8 (22%)	0 (%)	3 (25%)	0 (%)	0 (%)	1 (4%)	0 (%)
体調	4 (6%)	0 (%)	0 (%)	1 (5%)	1 (5%)	4 (11%)	2 (10%)	0 (%)	6 (18%)	0 (%)	2 (7%)	2 (12%)
理由不明	0 (%)	0 (%)	3 (12%)	0 (%)	1 (5%)	0 (%)	0 (%)	0 (%)	0 (%)	0 (%)	1 (4%)	1 (6%)
その他	2 (3%)	1 (4%)	6 (18%)	0 (%)	1 (5%)	2 (5%)	2 (10%)	0 (%)	4 (12%)	0 (%)	0 (%)	1 (6%)
合計	62 (100%)	23 (100%)	33 (100%)	19 (100%)	22 (100%)	37 (100%)	20 (100%)	12 (100%)	34 (100%)	28 (100%)	27 (100%)	17 (100%)

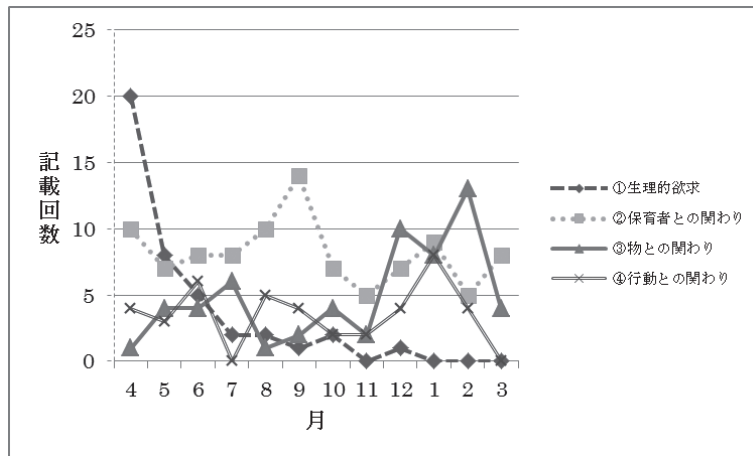


図1 月別の泣く行為の記載内容の変化

④ 行動との関わりで泣く行為

行動との関わりで泣く行為は、月によって0回の月もあれば8回の月もあり、月齢の影響はないと推察された。行動との関わりでの記載が多かった6月、8月、1月の内容を詳しくみると、6月は歯科検診（歯科検診を受けるという行動として捉えた）、8月は「水遊びをしたいのに止められて」というような水遊びに関して、1月は、「場所見知り」「遊びを止めさせられて」等内容は様々であった。行動の広がりによって「行動との関わりで泣く行為」も多くなると予想されるが、8月の水遊びに關す

る泣く行為は「保育内容」との関わりが深い泣く行為であった。前項でも述べたが、保育内容が、「クラス全体の泣く行為」に関わることを前提とした、保育者の環境設定が必要であった。

Ⅳ クラス集団と保育者の援助

「クラス集団に対する保育者の援助」を、これまで考察してきた月別の内容分析の結果から、筆者が必要だと思う事柄について考察した。

## 1 分析結果に対する保育者の援助

### ① 4月

登所時に泣く行為は、乳児と保育者がともに新しい環境に慣れる努力をしながら、徐々に関係を構築していったことにより、5月には3分の1近く減少していた。5月には1週間近い休みがあることを想定すると、入所時のような乳児の泣く行為があっても不思議ではない。それなのに何故泣く行為が減少したのだろうか。その理由として、「乳児が保育者を覚えていた」「乳児が保育室を含めた周りの環境を覚えていた」「保育者が乳児のリズムを把握し対応していた」等が考えられる。「乳児が保育者を覚える」というような「記憶」に関しては、今後より深い考察が必要であるが、「生後4～5か月には記憶が成立しているとみることができる」（乳幼児発達事典, 1985）と記述されているように、たとえ0歳児クラスといえども、入所時の「初めての出会い」を記憶している可能性がある。それ故4月の保育環境は、乳児の記憶に残る出会いとして非常に重要であり、その保育環境に欠かせないのが、人的環境でもある保育者の援助である。

保育者の援助としては、一人一人への関わりも大切であるが、園として、あるいはクラス集団として「受け入れ態勢を整えること」も大切だと思われる。保育者が一人一人の泣く行為に対応できる園の体制作りは、乳児が新しい環境に慣れるための環境作りでもある。対象園では、担当制の導入をしており、乳児が「保育者を覚える」ためにも保育者が「一人一人リズムを把握するため」にも、「特定の保育者との関わり」が重要な0歳児クラスの乳児には、有効な方法である。ただし、園によっては担当制が導入できない園もある。その時は、集団の様子をみながら、泣く行為が続く乳児の受け入れを特定の保育者が行うなど、緩やかに担当を決めておくのも方法の1つである。いずれにしても、保育者の「乳児の泣く行為に寄り添う気持ち」が大切である。

### ② 5月

乳児が保育所生活に慣れてきたことから、保育者との関わりで泣く行為が多くなり、「保育者を求めて泣く」「担任以外への人見知り」等、保育者と乳児の関係ができてきたことによる乳児の泣く行為がみられた。この「保育者との関係ができてきた」ことによって泣く行為は、保育者にとっても乳児との関係を実感する行為として肯定的に受け止められる行為である。反面、この関係性はスタートしたばかりなので、例えば保育者は、「薬を飲むのを嫌がった」時、保育者（人）を嫌いにならない配慮をしながら、薬を飲む方法を模索する必要がある。また、泣く行為の種類が多くなったことは、乳児の世界の広が

りを意味し、成長発達として受け止められるものであるが、クラスとしてもそれを受け止めるための、泣く行為の予測や、それに伴う配慮を考えておく必要があった。

### ③ 6月

6月は、クラス全体の泣く行為が、「生理的欲求で泣く行為」から「保育者との関わりで泣く行為」に移行した月である。保育者と親しくなり、「1対1での関わりを求める」乳児が多くなったことや、保育者への欲求や不快が物や行動に結びつくようになったことで、クラス集団としても「乳児への関わり方の見直し」をする月となった。例えば、保育者の関わりが、生理的欲求を中心に「乳児の世話をしていた時間」から、乳児の生活リズムがある程度一定してきたことで「乳児との遊びの時間」に移行したことで、「クラス全体の生活時間の見直し」や「保育者間の連携の見直し」が必要になったと思われる。

### ④ 7月

7月は、個人差が目立つ月となった。個人差への配慮は、保育所保育指針に「一人一人」という言葉があるように、保育者間でも大切なこととして受け止められているが、集団の中で一人一人の「泣く行為」の違いを受け止めるには、まず、職員間の話し合いと連携によって、保育者の「乳児の泣く行為に対応する時間の確保」が必要だと思われた。と同時に、どんな時に泣くのか等、乳児を「観察」し「対応を考えておく」ことも重要になってくる。また、子ども同士のトラブルにおいては、集団であるが故にみられるトラブルも多い。例えば遊びの場面での物の取り合いは、「一人遊びを楽しむ月齢」であれば、「一人遊びを保障する空間」や「おもちゃの数の保障」をする等、その乳児の発達の把握や発達に合わせた環境設定が必要となる。

### ⑤ 8月

水遊びを保育に取り入れたことにより、水遊びに関係した泣く行為がみられた8月は、保育内容と乳児の泣く行為の関係を考える月となった。よって保育内容と泣く行為の関係を考察するために、「遊びの中で泣いた行為（不快）」とその遊びと関連していると思われる「笑う・微笑む・機嫌がよい行為（快）」を表にしたのが表5の「不快」と「快」の表である。この表のように、遊びには、季節や月によって変化していくものや1年中行われるものがあるが、いずれも1年を通して行われる「快」と「不快」を伴った遊びによって、乳児が様々な経験をしていることが保育記録に記載されていた。「乳児保育における保育者との関係性（Ⅱ）」（佐々本・大方, 2016）で月



表5 「不快」と「快」

乳児	泣く行為（不快）	笑う・微笑む・ご機嫌行為（快）
A児	水遊びを止められて怒って泣く（16か月）	ご機嫌で水遊びを楽しむ（15か月）
B児	砂が嫌いで泣く（12か月）	外気浴、乳母車にのるとご機嫌（11か月）
D児	外遊び、手に砂が付いたのが嫌で（11か月）	砂やコップに触って笑顔（13か月）
E児	初めての沐浴でびっくりして（9か月）	水遊びを喜ぶ（10か月、11か月）
F児	遊びを制止されて、したいことを止められて（16か月）	とことこ歩くのが嬉しい（12か月） 消防車に乗せて貰ってご機嫌（13か月）
G児	外に出たいが出られない（12か月）	外気浴でご機嫌（6か月） 滑り台を喜ぶ（13か月）
H児	水遊びがしたかったのに止めさせられて（7か月）	沐浴を喜ぶ（7か月）

（本表には、佐々本・大方（2016）、p.201の資料と重複する事例がある）

齢における内容分析をした時にも指摘したが、「泣きは保育内容を左右する」（根ヶ山・星・土谷・松永・汐見、2005）が、反対に「保育内容が泣く行為に影響を与える」こともある。保育所ならではの様々な経験を心地よいものにするために、保育者は一人一人の「快」と「不快」に考慮しながらクラス全体の遊びの計画を立てる必要があるのではないだろうか。年間保育計画についてはより詳細な研究が求められるが、今回の「内容分析」から導き出されたその月の特徴は、その特徴を踏まえた事前の保育計画の必要性を示唆すると考えられ、泣く行為を予想した保育計画の作成は、乳児の泣く行為に対応する保育者の援助を考えるためにも有効な手段だと思われた。

#### ⑥ 9月

9月と12月に多くみられた「体調による泣き」は、9月は夏の疲れから、12月は感染症や風邪による体調の崩れからが多かった。結果と考察の項でも示したが、乳児は身体的な特徴からも、体調には充分注意する必要がある。集団全体に疲れを感じた時は、子どもの状態に応じた保育内容を考えたり、感染症や風邪が流行る季節は、集団としての事前の対策が必要である。

#### ⑦ 10月・11月

10月11月は、「泣く行為の」記述が少なく、泣く行為だけをみると落ち着いた月であった。新入児がクラス集団に溶け込むことで、全体の泣く行為も少なくなった。保育者は、新入児だけではなく在園児を含むクラス集団の様子にも目を配る必要があった。

#### ⑧ 12月

新しい出会いによる恐れや不安を「泣く行為」で表す乳児には、集団といえども個別の配慮が必要である。例えば大勢が集まる遊戯室のような場所での出会いであれば、恐れや不安を感じるものから少し距離を置いた場所

や、保育者の膝の上のような安心できる場所の確保も必要である。行事は、経験を肯定しつつも、クラスまたは園全体で乳児の発達に応じた参加の仕方を考え、計画を立てることが望まれる。

#### ⑨ 1月

人見知りは1年中みられたが、8月や1月には複数の人見知りがみられた。人見知りは、愛着や認知の育ちが大きく影響していると考えられるが、恐れに対する「情動発達」も大切な要素だと考えている。保育者が、「好き、嫌い、怒り、恐れ、喜び等の情動は、成長によって発達していくもの」という認識を持って保育にあたることは、「泣く行為」を理解する土台になる。また、特定の保育士を求め、一緒に生活してきた担任でさえ拒否することがある、後追い行動を含む人見知り行動は、しばしば保育者の悩みとなるが、主担当の他に副担当を置く等、この行動を見守ったり、受け止めたりするためのクラス内の連携が求められる。

#### ⑩ 2月・3月

どのような月齢で集団が構成されているかにもよるが、2月・3月にみられた、泣く行為を「乳児の意思の伝達」として受け止める重要性は、様々なところで伝えられている。筆者の経験を参考事例として取り上げると、次のようなことがあった。男児（16か月）が食事中、大きな声で泣いていた。クラス担任に事情を聞くと「苦手な物を口に入れたら、泣き出して泣き止まない」とのことであった。「泣いて、嫌だという意味を表しているのだから、苦手な物を引き上げて、好きな物だけを机の上に置いたら」というと「好きな物だけにしても、机の上の物が全部見えなくなるまで、食べさせられると思って泣き止まないんです。」とのことであった。「それなら、一度机の上の物を全部なくしてから、改めて好きなものを出してみたら？」ということになり、結果、泣くことな

く、苦手だったものも口にするようになった。「泣く行為」を単なるわがままと受け止めるのではなく、乳児の思いとして受け止めることは、乳児の育ちを保障するだけでなく、保育者を援助することにもなると改めて感じた事例であった。

## 2 保育者の援助における課題

「泣く行為の月別分析」をみてもわかるように、保育者は実に様々な「泣く行為」に対応している。と同時に、集団保育のなかでは、「排泄の世話」「食事の用意」等、他の様々な状況にも対応しなければならない。例えばなかなか泣き止まない乳児に対応する時は、誰かに他の乳児の世話を頼まなくてはならない。「お腹がすいた」と泣く子がいた場合、子どもの姿に合わせた食事時間の設定も必要になってくる。保育者1人で3人の乳児をみながら、なおかつ1対1の関わりを大切にするにはどうしたらいいか。今回グループによる特徴を考察したが、同じ月齢の乳児を担当するか、それとも違う月齢の乳児を担当するかでも、担任間の連携の仕方は変わってくる。日々の保育をスムーズに進めるためにも、担任同士の連携は不可欠であり、クラスでは対応できない場合は園全体の連携も必要であろう。

また、「泣く行為」を「負」のイメージだけで受け止めないことも大切である。「泣く行為」は様々な意味を持つが、それは成長発達と大きく関わっている。集団の中ではトラブルもあるが「ともだちが登所すると喜んで寄っていく」「ともだちといることを喜ぶ」等ともだちの存在を意識した行動もみられる。また、「おもちゃが欲しくて取りに行き、もらえずに泣く」という泣きには「自分と他者」の存在がある。その他に「ともだちがしているのを見て自分もしたくて泣く」という事例もあった。「ともだちのしていることを自分もしてみたい」という欲求は、ともだちがいたから芽生えた欲求である。周りに「自分以外の存在がいる」と知るとは、社会性の育ちのスタートともいえる。

## V おわりに

「乳児の泣く行為の月別内容分析を行い、クラス集団として考察する視点」は、なんどもその意味を問われ、その都度中止してきた研究である。その理由は、「月齢によって泣く行為を分析し個人の発達を追っていく方法」とは違い、クラスの泣く行為を集団として分析しても大雑把な内容しか導き出せず、結果が曖昧になるのではないかということであった。そのため筆者は、「個人の発達の視点」から「乳児保育における保育者との関係性（Ⅰ）」

では情動を、「乳児保育における保育者との関係性（Ⅱ）」では月齢による内容分析を行い、一定の結果を得た。その上で、再度この研究による視点を明確にして内容分析を試みることにした。それが「集団」としての視点である。その結果、乳児が泣く行為には月ごとに表れるクラス集団としての特徴があった。

筆者は、保育現場において、困り感を持つ保育者が多い乳児の「泣く行為」について、少しでも「肯定的に受け止められる要素があれば、保育の役に立つのではないか」という思いでこの研究に着手してきた。そして、保育記録の分析によって、乳児の泣く行為には様々な要素が含まれていることを知った。特に「保育の積み重ねが、乳児の欲求となり、その欲求が泣く行為として表れる」ことや「子どもの姿を予想して保育計画を立てる重要性」を知り得たことは、乳児が泣く行為に対する保育者の関わり方を考える上で非常に参考となった。その上で、乳児にとって、大人との様々な関わりのおこしである泣く行為は、尊重されるべきものであり、自由に泣いたり笑ったりできる環境を整えておくことが大切だという思いに至った。

泣く行為に対しての困り感は、ベテラン保育者と新任の保育者とは違い、(泣く行為に対して)「ベテランの技の更なる検討が必要」(根ヶ山他, 2005)であれば、「ベテラン保育士が知っている数多くの対処方法」を「泣く行為を肯定的に受け止められる環境」を保障しつつ、職員同士で話し合い、対処方法を共有しておくことが、保育者の保育を助け、保育の質の向上にも繋がると思われる。

今回の考察は、筆者自身も冒頭で指摘を受けてきたような「困難さ」に直面しながらの考察であった。しかし、「乳児保育における保育者との関係性（Ⅱ）」でも示したように、保育には、乳児理解と推察という2つの観点が必要である。だからこそ、困難であろうと、今まで経験に頼ってきた保育を言語化し明確にすることが必要だと考えている。乳児にとって基本の行為である「泣く」行為と更には「笑う・微笑む」行為に向き合うことが、微力ではあっても乳児保育の質の向上や保育者の役割の重要性の理解に繋がることを期待している。

## 註

注1) 保育に携わる者の呼び名としては「保育士」が使われるが、施設によって「保育教諭」や「看護師」、免許を持たない「保育助手」が関わったりする場合があるので、論文内では「保育者」に統一した。なお、事例の中で、「保育士」を使用しているのは、実際保育士が関わり、保育記録に「保育士」と記載されているものはそのまま使用した。

注2) 2012年5月から7月にかけて、A市において、0歳児クラスと1歳児クラスの担当保育士を対象に、筆者が行った質問紙調査。A市の保育課に依頼し、全33の保育所、保育園に質問紙を配布、173名から回答を得た。乳児の「泣く行為」と「笑う行為」に対して、様々な意見が寄せられた。(乳児保育における保育者との関係性(I)再掲)

### 〔引用文献〕

- 保育所保育指針解説書(2008). 厚生労働省編. フレーベル館. pp32-54.
- 保育所保育指針(2017, 告示). 厚生労働省. pp17-51.
- 黒田実郎監修・伊藤隆二・隠岐忠彦・花田雅憲編集代表(1985). 乳幼児発達事典. 岩崎学術出版社. pp90-91.
- 黒田実郎監修・伊藤隆二・隠岐忠彦・花田雅憲編集代表(1985). 乳幼児発達事典. 岩崎学術出版社. pp5.
- 松村京子(2006). 乳児の情動研究:非接触法による生理学的アプローチ. 日本赤ちゃん学ペーパーサイエンス pp1-9.
- 佐々本清恵・大方美香(2015). 乳児保育における保育者との関係性(I)ー観察記録からみた乳児の「泣く行為」よりー. 大阪総合保育大学紀要第10号 pp139-149.
- 佐々本清恵・大方美香(2016). 乳児保育における保育者との関係性(II)ー観察記録からみた乳児の「泣く行為」よりー. 大阪総合保育大学紀要第11号 pp191-204.
- Sroufe, L, A (1995). Emotional Development-The organization of Emotional life in The early years. -(Cambridge University Press, Cambridge).
- 斉藤こずゑ・武井澄江・荻野美佐子・大浜幾久子・辰野俊子(1981). 生後2年間の伝達行動の発達ー母子相互作用における発声行動の分析ー. 教育心理学研第29巻第1号 pp20-29.
- 志村洋子(2005). 乳児の音声における非言語情報に関する実験的研究. 風間書房. pp10-25.
- 主婦と生活社編. 家庭の医学(1985). 主婦と生活社. pp776-774
- 根ヶ山幸一・星三和子・土谷・松永・汐見(2005). 保育園0歳児クラスにおける乳児の泣きー保育士による観察記録を手がかりにー. 保育学研究第43巻第2号. pp65-72.

### 〔参考文献〕

- 阿部和子(2007). 乳幼児保育の基本. 萌文書林.
- Daniel N. Stern(1985). The Interpersonal World Of The Infant: A View from Psychoanalysis and Developmental Psychology. 乳児の対人社会(理論編)小此木啓吾・丸田俊彦監訳 神庭靖子・神庭重信訳(1989). 岩崎学術出版社.
- Daniel N. Stern(1985). The Interpersonal World Of The Infant: A View from Psychoanalysis and Developmental Psychology. 乳児の対人社会(臨床編)小此木啓吾・丸田俊彦監訳 神庭靖子・神庭重信訳(1989). 岩崎学術出版社.
- Erik H. Erikson(1950). CHILDHOOD AND SOCIETY. 幼児期と社会1 仁科弥生訳(1977). みすず書房.
- 今井和子・天野珠路・大方美香(2010). 独自性を活かした保育計画に基づく指導計画ーその実践・評価ー. ミネルヴァ書房.
- 星三和子・塩崎美穂・勝間万喜・大川里香(2009). 保育士はゼロ歳児の「泣き」をどうみているかーインタビュー調査から乳児保育理論の検討へー. 保育学研究第47巻第2号 pp49-59.
- J. ボウルビィ. 母子関係の理論(1)愛着行動 新版. 黒田実郎・大羽葵・岡田洋子・黒田聖一訳(1991). 岩崎学術出版.
- 開一夫(2011). 赤ちゃんの不思議. 岩波新書.
- 小西行郎(2003). 赤ちゃんと脳科学. 集英社.
- 大方美香(2005). 乳幼児教育学. 久美株式会社.
- 芝田奈生子(2005). 日常的相互行為過程としての社会化ー発語ターンとしての「泣き」という視点から. 教育社会学研究第76集.
- 田中順子(2004). 情報社会における子供とのコミュニケーション:「双方性」の意味を問い直す. 情報社会試論 Vol.9.
- 玉川大学あかちゃんラボ編(2011). なるほど!赤ちゃん学. 新潮社.
- 田矢幸江・柏木恵子(2004). 乳児期の社会性対人関係の発達ー保育園登園場面の観察からー. 発達研究第18巻.
- 東京都公立保育園研究会(1997). 0歳児保育の実際. 東京都公立保育園研究会. 231.
- 陳省仁(1986). 新生児・乳児の泣きについて初期の母子相互交渉及び情動発達における泣きの意味. 北海道大学教育学部紀要48巻.
- 吉本和子(2002). 乳児保育 一人ひとりが大切に育てられるために. エイデル研究所.

## The Crying of Infants and Human Contact (Ⅲ) : An Observation-Based Study

Kiyoe Sasamoto\* Mika Oogata\*\*

\* *Osaka University of Comprehensive Children Education Graduate School*

\*\* *Osaka University of Comprehensive Children Education*

This paper is the third instalment of research aiming at identifying the reasons for the crying of infants and the role of nursery teachers in that process. The authors have analysed the nursing records in which nursery teachers observed the behaviour of ten infants for the year starting 1 April 2012 when they joined Nursery School A in City A (except for one infant who started attending the school on 20 October in the same year). The infants were all aged between 0 and 12 months when they joined the school. From the records, the authors have selected descriptions involving their crying, and classified them into nine types of categories in order to gauge the effects of the teachers' responses. In this instalment we have analysed the records monthly for the group, and found that their crying showed month-on-month changes. The main findings are: (1) the infants' desire and need to contact their teachers connected closely to their crying for every month; (2) how the teachers responded to their crying also affected their crying; (3) the reasons for their crying changed as they got older, and similarly their crying as a unit showed monthly changes; (4) the presence of other infants also affected their crying, and; (5) the crying of the infants in their same-age groups showed certain key characteristics. These findings show how the teachers' response affected their crying within the group, and suggest the importance of the teachers' engagement with the infants.

**Key words** : infants, crying, role of nursery teachers